



市民民主主義運動の論理と心理

いいだもも

二・七（一九六五年アメリカの〈北爆〉開始）から六・九（ベトナム侵略反対国民行動日）にいたる、わが国のベトナム戦争反対運動の第一段階が示している、注目すべき現象的特徴は、それが、スロー・スターティングであったということ、セルフ・スターティングであったということ、しかも、その出発の両特徴に深刻な内的連関があるということ、でしよう。

ベトナムをめぐる反戦平和の大衆行動の日録を、点検してみても、だれしもすぐに気づかざるをえないことは、諸外国（社会主義諸国をのぞいてみてさえも）におけるクイック・スターティン

グと、日本におけるスロー・スターティングとの、鮮やかな対比(私たちにとつて無慘とさえ言えるほどのあまりに鮮やかな対比)です。アメリカ軍がベトナム民主共和国の都市(クアンビン州ドンホイ市)に対する挑発的爆撃を開始した二月七日には、即座に、ニューヨークの国連本部前と、トロント(カナダ)とで、抗議の大衆デモが起こっています。ドンホイ市が再爆撃されたよく二月八日には、国連本部前におけるアメリカ平和諸団体の共同デモのほか、モントリオール(カナダ)のアメリカ領事館前、ストックホルム(スウェーデン)のアメリカ大使館前、コペンハーゲン(デンマーク)のアメリカ大使館前において、それぞれ大衆ビケットが張られました。二月九日、ロサンゼルス(アメリカ合衆国)、サンフランシスコ(前同)、ローマ(イタリア)。二月十日、ジャカルタ(インドネシア)、デリー(インド)、カルカッタ(前同)、モンテヴィデオ(ウルグアイ)、ワシントン(アメリカ合衆国)、メルボルン(オーストラリア)、コペンハーゲン(デンマーク)、ローマ(イタリア)、フィレンツェ(前同)、パーミンガム(イギリス)。二月十一日、カンカイ(ラオス)、カリフォルニア(アメリカ合衆国)、ニューヘヴン(前同)、サンチャゴ(チリ)、ピサ(イタリア)、ジュネヴア(前同)。二月十二日、パリ(フランス)、グルノーブル(前同)、シュトラスブル(前同)、オスロー(ノルウェー)、ウィーン(オーストリア)、ヘルシンキ(フィンランド)等々。

〈体制間戦争〉の危険を目前の契機として、アメリカ帝国主義のベトナム反革命戦争に抗議する、諸国民の大衆的反応は、めざましく、爆発的にスタートした、と言うことができるでしょう。ところが、日本における大衆行動は、スターティングがきわめ

て遅かった。日本がベトナム侵略軍事行動の間接基地であり、ポラリス潜水艦の寄港基地であるにもかかわらず、抗議行動の起ち上りがきわめて遅れた、という事実を、私たちは残念ながら確認せざるをえませぬ。日本における最初の大衆的抗議行動は二月十五日にいたって、アメリカ軍の直接出動基地である沖縄において、百五十名の集会・デモとしてようやく組織されました。本土における直接の大衆的抗議運動は、二月二十六日の、東京地評主催労働者集会(三千名)、あるいは、三月三日の、大阪天王寺共闘主催抗議集会(百五十名)を、待たなければなりませんでした。申すまでもなく、わが国は、ヒロンマ・ナガサキ・ビキニの被災体験を持ち、ある意味では、その国民的体験を普遍人類的な平和価値にまで昇華してゆく大衆運動の上で、絶対的とも言える有利さを持っている筈です。現に五、六年以前までは、日本原水協一八・六原水禁世界大会という回路を循環する〈原水爆禁止国民運動〉によって、わが国は、沈滞した〈欧米平和運動を先進的に領導している観をさえ呈していました。その日本において、しかも、日米「安全保障」条約によってアメリカの〈核の傘〉のなかにしぼりつけられているという危険きわまる条件の下に置かれている日本において、佐世保を寄港基地とするポラリス潜水艦が東南アジア海域を遊弋し、核武装したアメリカ第七艦隊がベトナム海域を海上封鎖し、ダナン基地に原子曲射砲が持ちこまれる、という緊迫した状況にもかかわらず、それに対する大衆的攻撃が、欧米平和運動・AALA平和運動に對比して、最後進的なスロー・スターティングしか示しえなかった、という事実は、私たちの自省を深く促すものがあります。核戦争はこれを未然に防止する以外にはない、という第二次世界大戦後における平和運動の

一つの特質をなす自明な原理に、照らしてみた時、この大衆的平和行動の即発性・機敏性の欠如の問題は、単なる偶然の結果や技術的遅速の問題として軽視することはできません。

あえて言うならば、このスロー・スターティングによって、わが国の平和運動を（とくにこの数年來冒してきた病患の実態が、はしなくも露呈された、と言うことができます。岡村昭彦さんの『ベトナム写真集』や開高健さんの『ベトナム戦記』の（流行）にも示されているように、この間の、ベトナム問題に対する日本人の関心や心理的反応が、かならずしも遅鈍でも狭小でも稀薄でもなかった事実、を思いあわせるならば、大衆的平和行動のこのスロー・スターティングには、日本平和運動の現在の体質とくにその大組織的指導の病理現象が如実に顯示されていた、と言わなければなりません。革新諸政党をはじめとする大組織の私有領地化・系列化に冒されてしまった、わが国の（原水爆禁止国民運動）の内的空洞化・無力化の度合が、どの程度の惨めさにまで達しているかを、それはまさまざと示しました。ベトナム危機が顕わにしたものは、今日の日本平和運動の主體的危機でもありました。

わが国の革新諸政党をはじめとする大組織の指導、政党本位に系列化された各原水爆禁止運動の中核部が、こうして、幹部抗議・決議・声明・打電・抗議文手交程度 of 自慰的 self 運動以上には出られずに、指導麻痺・行動不能のインポテンツ状態に陥っていたこの重大な時期に、市民社会深部からの広汎な関心・反応は、個々の自然発生的なセルフ・スターティングとして開始されました。W・F・P（平和のために歩こう）の五名の市民が、日比谷公園とアメリカ大使館付近を（セツケン・デモ）したのが、三月十九日。同じく三名の市民が、（銀ブラ・デモ）を行い、「世

界民衆平和を結ぶ会」の世界民衆ベトナム平和要請署名運動が、渋谷駅前で開催されたのが、三月二十日。二十二名の市民が東京駅周辺で（ハンソンドイツマン・デモ）を行い、「アメリカの北ベトナム爆撃に抗議する市民有志」のよびかけた自発的抗議デモが三百名を結集したのが、三月二十五日（同じ頃、三月二十四日には、アメリカ合衆国のミンガン大学で、創意的な行動形態（ティーチ・イン）が初登場しました）。

上からの系列スイッチだけに依存する大組織の形骸化した平和運動が、スロー・スターティングでもたもたしていた時期に、その解体過程の逆イデオロギー表現である（自立主義）によってもなお分解しきることのなかった究極のもの——市民個人の自発的主体性において、下からの散発的なセルフ・スターティングが発動してきたのでした。この「市民有志」のセルフ・スターティングは、（欧米平和運動ではむしろそれが常態ですらありますが）、従来の日本の「国民運動」や「共闘組織」には本質的に欠如しがちであった自発的始動形態であり、そのようなものとして、四月二十二日の「ベトナムの平和をねがう市民の集会」（八百名）、四月二十四日の「ベトナムに平和を！」市民・文化団体連合の集会・デモ（一千五百名）を誘導する始動力となったのでした。そして、ベトナム戦争反対運動の第一段階において、このような（市民民主主義的運動）が、六・九国民行動日をひきだし、成功させる有効な側翼となったことは、ここに改めて強調するまでもないことでしょう。この具体的効能を、市民主義の限界や自然成長性の限界の一般的指摘によって没却することは、できないことです。ある意味では、特殊な歴史的条件と機会を巧みに捉えて、革新系大組織の多くの部分を「一日共闘」に動員することができ

た、端緒としての「五名の文化人」のイニシアチヴそのものも、セルフ・スターティングな市民的主体性に基ついた創意にはかならなかつたのです。

私はこの小論においては、限られた紙数の関係上、こうした「市民主義的」な平和運動は、六・九以後の第二段階においては、革新諸政党をはじめとする大組織の「国民運動」のなかに、単純に急速に解消（あるいは止揚）されてしまうものであろうか、という私自身の疑問、ならびに、大組織平和運動と市民主義運動との重層的複合の問題は、わが国では安保反対闘争以後（とくに「安保反対共闘会議」の瓦解以来）顯著に私たちの意識に上つてきた問題であるとはいへ、単にわが国の今日の時期にだけ偶有の問題（いわば便宜の問題）なのであろうか、という私自身の疑問に導かれて、欧米諸国の最近の平和主義的・市民主義的な平和運動のあり方についてだけ、若干の検討を試みてみたいと思ひます。

四月二十四日の「へへ平連」集会においてアメリカ平和運動を代表して戦闘的挨拶を行い、五月二十二日の画期的な「ベトナムの日」日米市民共同行動への道を開拓した、S・P・U（学生平和同盟）の若い活動家「フィリップ・G・アルトバツハ」は、「アメリカ平和運動の特色」のなかで、「一九四九年から一九五九年までの十年間は、アメリカの自由主義者や進歩主義者にとつて暮しにくい日がつづき、平和運動も困難な時期であつた」と回顧しています。アメリカ平和運動の十年間におよぶこの沈滞が打ち破られたのは、まさに一九六〇年二月一日、ノース・カロライナ州グリーンズボロのキャプテリヤに、黒人差別に抗議する学生が、

非暴力的な直接行動「シット・イン」を敢行したことに、端を発しています。ジャック・ニューフィールドの最近の論評「学生左翼」が描いているように、「豊かなアメリカ」の不妊の胎内から生れ出たこの急進主義の新しい世代は、今日、ワシントン大行進を組織できるまでにさまざまな成長を上げていますが、直接には労働組合運動や共産主義運動の外で、しかも、三〇年代以来の伝統的急進主義者（たとえばマイケル・ハリントンやジョン・ローク等）とも一応切れたところで、「新民主主義者」としての彼らの運動を展開してきたわけです。この「まぎれもないアメリカの新左翼」をはぐくんだものは、マルクス、トロツキー、スターリン、シャハトマンではなく、カミュ、ポール・グッドマン、ボブ・ディラン、そしてSNCC（学生非暴力調整委員会）である、とニューフィールドは指摘しています。「指導者なんていらぬ」と好んで唱う彼らの組織—SNCCは、クエーカー式の完全合意方式によって運営され、会員を持たずに要員だけを持つていような「組織」なのです。SNCCのすぐれた指導者ボブ・パリスは、ことしの二月、「ヘーゼ」という有名なベンネムを捨てて、バーミンガムに移住することによって、指導者の地位から自ら「亡命」した、と言われています。「底辺の人びとはまったく指導者を必要としない。彼らが必要としているのは、自らの価値についての自信であり、自らの生活について決定を下すための「一貫性なのだ」というボブ・パリスの言葉は、新しい世代の哲学は「人間主義的無政府主義」である、というニューフィールドの意見を、よく裏書きしています。SNCCは、反共や容共であるよりもむしろ「非共」なのです。

C・T・R（三重革命委員会）によって全体的行動の調整をは

かっている、新しい六〇年代世代的知的反乱は、アメリカ合衆国における「成功とよばれる静かな絶望」に対して向けられ、資本主義と国家の変革そのものを目標とするにいたっています。労働組合運動(AFL-CIO)や革新政党運動(社会党・共産党・トロツキー派)とは結びつきがほとんどないところから発生しており、労働運動よりは黒人公民権運動からの豊かなエネルギーと創意的行動形態を汲みとっています。「三重革命」とは、周知のように、黒人問題・平和問題・オートメーション問題の三重課題を意味しますが、ワシントン二万人行進を指導したS・D・S(民主的協会のための学生連合)の委員長ポール・ポッターが、日米共同行動「ベトナムの日」、カリフォルニア大学(バークレー)の「ティーチ・イン」において行った演説は、黒人公民権運動とベトナム戦争反対運動との複合(一般化して言えば、市民民主主義的権利と反戦平和との結合)をみごとに喝破しています。「ベトナムにおけるアメリカの殺人行為と、南部における白人の黒人に対するテロは、同じことなのだ。アメリカは、ベトナム人の運命を、彼らに代って定めようとしている。同じように、南部の白人は、自分らが黒人の運命を定めるのだと思っている。この意思決定を行っている連中、この巨大な官僚制、これをわれわれは検討し、研究し、変革しなければならぬ。さもないと、この怪物はわれわれを亡ぼしてしまうだろう」。「ティーチ・イン」という新しい平和行動形態そのものも、黒人公民権運動における「シット・イン」「ライ・イン」「ショップ・イン」等の非暴力的抗議戦術の発展にほかなりません。

やはりカリフォルニア大学の「ティーチ・イン」において演説した、ノーマン・メイラーは、ジョンソン大統領の小さな肖像切

手を何百万枚と国中に逆さまにして貼りつけることを提唱し、「アプサイド・ダウン! アプサイド・ダウン!」と連呼しながら降壇したそうだが、新しい(冷戦後)世代的直接の先任者がもしいるとしたならば、それは、ブルジョアの二大政党下のアメリカ型労働組合主義者でも三〇年代以来の伝統的急進主義者でもなく、むしろ、メイラーがかつて「未来の哲学」のひとつであると推賞したアメリカ的実存主義の担い手「ヒップスター」であるにちがいない。「それは、原子戦争による即死や、巨大な強制収容所にほかならない国家による比較的早い死、またはいっさいの創造的・反逆的本能を絞め殺された順応精神による緩慢な死(これが精神や心臓・肝臓・神経などにどんなに有害であるかは、どこかの癌研究所でもすぐには発見できないにちがいない)とともに生きることが、われわれ全体の条件であり、青春期から、まだ時いたらぬのに老衰してしまうまで、こうした死とともに生きることが、二十世紀の人間の運命であるとしたら、生命の糧となる唯一の答は、死の条件をうけいれ、身近かな危険としての死とともに生き、自分を社会から切り放し、根なし草ずらとして存在し、自己の反逆的な至上命令への、地図もない前人未到の旅に立つことだということを自覚している人間である。……ひとはヒップになるか、スクエアになるか(アメリカ生活に入ってくる新しい世代は、すべてどちらかひとつを選ばなければならぬことを感じはじめている)、反逆者になるか、順応主義者になるか、アメリカの夜の生活の荒野の西部の開拓者となるか、それともアメリカ社会の全体主義的組織の隅におちて、成功するためにはいやおうなしに順応しなければならぬ運命にあるスクエアの一細胞となるか、である。……ヒップの起源が黒人であること

は、すこしも偶然ではない。黒人は過去二世紀にわたり、全体主義と民主主義の限界で生きてきたからである（『白い黒人』）。アメリカの実存主義者であるヒップスターは、当時すでに、そのほとんどが無政府主義的な平和主義者であり、C・O（良心的兵役忌避者）であったのです。

「ピースニク」とあだ名されている今日の平和世代の二人に一人の類には、五〇年代の「ビートニク」のあの独特な陰毛ひげが見られるでしょう。ニューフィールドは、「一九五〇年代には、アメリカ合衆国の学園でみられた反抗の兆候といえば、わずかに、コップのなかの存在のようなビートたちがあつただけだった。ビートたちは、アメリカ合衆国の瀬戸際政策、検閲、景品チケットの経済に、なにか狂っているものを感じとってはいたが、それについてなにか行動をおこすためのエネルギーも真剣さも欠いていた。そこで彼らは、反社会的な沈黙の「地下文化」にひきこもり、ジャック・ケラワツクの「気の向くまま口をついて出る詩」に熱中しただけだった」と述べていますが、一九六〇年春に中西部諸州から全土にわたって爆発的に黒人差別に対する社会的抗議行動に起ち上つた学生たちは、「沈黙の世代」とよばれたこのビート・ジエネレーションの直接的な行動の継承者にはかなりません。彼らは、黒人的・ジャズのサブ・カルチャーオールアンダー・カルチュアの世界（ポールドウィンの巧みな小説題名によれば「もう一つの国」への沈潜から、社会的地上にこの国に躍り出てきたのです。ノーマン・メイラーは、たとえば故ジエームズ・ディーンのような若者を「ヒップスター的英雄」の典型としてあげていますが、ケラワツクの気の向くままに口をついて出た詩——『ザ・ビート・ジエネレーションのジャズ』のごときも、「ジエームズ・

ディーン風散文」として若い世代によって愛唱されていたのです。「ビート世代の聖書」と呼ばれる、アレン・ギンズバークの有名な『吠える』を読んだ者は、詩人が現代アメリカ社会を古代フェニキアの火神モーラックに喩え、「モーラックの精神は単なる機械である。モーラックの血は流通するドルである。……モーラックの摩天楼は永遠のエホバのごとく長い通りに立っている」と悲痛に弾劾していたことを思い出すことができます。さらにギンズバークの『カディッシュ』を読む者は、ロシアからの移民であつた彼の母が、モーラックにその精神を粉碎され、「アメリカの毒性のトマト」にあてられることによって、錯乱のうちに窮死したことを、知ることができます。そして、「さようなら。共産党員で。破れた靴下をはいていた。かあさんよ」という慟哭を発見して、思いがけなくもビート詩人が現代のモーラックに破れた共産党員の息子であることを、知るでしょう。モーラックに対するビートニクの詩的復讐戦は、「合衆国の中産階級の価値観に反逆した」今日のピースニクの知的反乱によってひきつがれた、と見ることが出来ます。ローレンス・リプトンは、『聖なる野蛮人』というビート紹介書の序文のなかで、つぎのように述べたことがあります。「一つの文明国の周辺部に野蛮人があらわれた時には、それはその文明国が危機にあることを示している。もしも野蛮人が、戦いの武器ではなく、歌や平和の像をもってあらわれる時には、その危機が精神的性質のものであることを示している。まさに、アメリカ文明の危機にあたって、新しい野蛮人は周辺部から歌や平和の像をもってあらわれたのです。

一九六三年七月のモスクワ核実験停止協定の成立によつてもた

らされた、「運動の停滞ないし解体の傾向は、『平和主義』や『中立主義』の諸潮流によって指導されたヨーロッパの核兵器反対運動にもかなり顕著にあらわれている（イギリスのオールダーマストン行進の中止など）が、なかでもアメリカ帝国主義の本国における平和運動の衰退」はきわめて顕著である、と主張してやまわいわが国の中国派・代々木派系御用理論家の「論証」にもかかわらず、端的な事実は、久しい運動の停滞ないし解体ないし衰退の傾向から脱した欧米平和運動がひきつづき上げ潮に向っていることを、かなり顕著に示しています。「オールダーマストン行進」とも通称されているイギリスの「復活祭平和行進」は、昨年「中止」されるどころか、アメリカの黒人公民権運動におけるワシントン大行進の経験をすばやくとりいれて、一日限りのロンドン平和行進として組織されましたし、今年の恒例日には、五万人が結集する（ベトナム戦争反対）の三日間行進となつて爆発し、「一九五八年以後毎年行われている戦争反対のデモンストレーションのうちで最大の行進の一つとなつた」と報道されています（『ナショナル・ガーディアン』）。行進に参加したオックスフォード大学の大横断幕には、「ハロルド・ウィルソン（労働党政府首相）はどこへ行ってしまったのか？ ペンタゴン（アメリカ国防総省）に這つていったのさ」と書かれてあつた、ということですから、「アメリカ帝国主義の本国における平和運動」も、同じくらしいに口の悪い、聖なる野蛮人たちに担われて、黒人公民権運動に学んだワシントン平和行進や「ティーチ・イン」となつて爆発し、自由主義的なS.A.N.E.（核政策健全化委員会）をも、若いエネルギーであつさりと乗り越えてしまいました。そして、アメリカ合衆国の「ピースニク」が黒人問題・平和問題・オートモーシ

ョン問題の「トリップル・レヴォリューション」を日程にかかげ、イギリスのC.N.D.（非核武装運動）のなかからも「市民権闘争、人種平等、社会福祉」への戦線拡大を提唱する急進派が最近めざましく擡頭してきていることは、欧米平和運動の階級的質の前進の点から見ても注目すべきものがあります。

冷戦の十年間を蔽つていた白人優越主義的・福祉国家主義的麻痺の一角を突き破つた、こうした聖なる野蛮人の周辺の平和運動の開始は、あまりに概括的な公式主義的予定表によって占うとするならば、核帝国主義国の心臓部にいる工業プロレタリアートが「自覚めたる巨象」としての圧倒的な平和のイニシアチヴを発揮しはじめるまでの、経過的な、前段的な市民主義的露払いを担っているにすぎない、と言つて言えないことはないかもしれませぬ。S.N.C.C.やC.N.D.の市民主義的平和運動にくついている極端主義的尻尾を、ひんしゆくしてみせることによつて、自らの「マルクス主義」的良識のほどを披瀝する一部の旧左翼は、とくにそうした小姑的批評によつて自らのインポテンツを慰める傾向が強いようです。

たしかに、アメリカ合衆国で最近「麻薬左翼」あるいは「跳ね上り左翼」と呼ばれている、社会の落ち層たちの極端主義的行動には、世のひんしゆくを買うに足るものがあります。ニューヨークのイースト・ウィレッジにたむろしている「ニュー・ボヘミアン」たちの平和行動（一）や、パークレーの「卑猥言論運動」等には、前代のビートニクの流行風俗であつた陰毛ひげ、ブルージン、ビート禿、「ポット」という隠語で呼ばれるマリワナ等々が、そのショックキングな露悪趣味によつて一層俗悪化された形で、もちこまれています。麻薬と同性愛を政治活動と混同している

「ポット・レフト」は、急進的作家のリロイ・ジョーンズやマーク・シュライファーにひきいられて、「SNCCは、非暴力主義の中産階級にすぎない」「われわれは今日の世界に存在するあらゆる左翼よりもさらに左翼だ」「フルンチョフは白人自由主義のシンボルだ」等と揚言しながら、中国派分派P・L・M（進歩的労働運動）の政治活動にも参加しています。イギリスにおけるイスター・マーチの尻尾にも、（怒れる若者たち）の俗悪版が付随していることは、たとえばノーマン・モスの『若者たちはどこへ行ってしまったか』を一読すれば直ちに看取することができます。「デモンストレーション」は、ますます多くのギターをかかえて髪をふりみだした若者たちをひきつけるようになった。彼らは、放浪主義への口実を芸術より政治のなかにみいだしたのである。また運動はそれ自身のルンペン・プロレタリアートを生みだし、彼らは警察をからかったり、野卑な言葉をどなったりするためにデモに参加し、しばしばデモの組織者たちの手を焼かせた。しかしながら、達観して言うならば、これらの極端主義的尻尾はあらゆる真正な大衆運動のスターティングには避けがたい随伴物なのであり、とくに「ゆりかごから墓場まで」あるいは「胎内からあの世まで」をがっちり管理して出る〈福祉国家〉への最初の反逆は、鬱積した汚物をもあわせて排出せざるをえないのであり、そのようなものとしてそれは、運動の大衆的成長とともに克服されてゆくものにはかならないでしょう。

すでに一九五七年に、ジャン・マラケが、ノーマン・メイラーの『ホワイト・ニグロ』を論評して、「ヒップとは、ルンペンの別名にすぎない。ルンペンは、りっぱな順応主義者になり、『秩序』のための最も優秀な潜在的紋刑吏となる」と批判してい

ます。「むかしむかし、ル・プロレタリアートという名の神話があった」という皮肉な書き出しで、マラケは述べています。「この神話はあきらかに男性ではあったが、赤ん坊を懐胎していると信じられていた——聖書に忠実な、よく順応させられた、社会主義の赤ん坊を、である。赤ん坊がいつまでたっても生まれないので、順応主義者たちの会衆は、最初は懐疑的になり、それから露骨にうんざりした。彼らは……もつとまじな、こんな石女でない神話をさがしはじめた。……そこには、幸福なことに再発見された秘密のエデンの園のように、自由主義、民主主義、自由世界、平和、原水爆実験禁止等々、そして——敬意をほらうべきものに敬意をほらうて——長いあいだ無視されていたル・プロレタリアートの異母弟の、マリワナーびりりのヒップなど、おどろくほど新鮮な生きるための理由が、勇敢な神話探し屋を待っていた。……ノーマン・メイラーは、ちよつとあげただけでも、スウェーデン、イギリス、ロシア、ポーランド、フランスなど、黒人のいない国々にも、アメリカのヒップスターの片割れや同類がいる、ということ、忘れてはならない。スウェーデンの青少年たちは、血に飢えたように暴れまわる。イギリスのテイ、ロシアのベスプリゾルニエ、ポーランドの不良つ児、フランスのえせ実存主義的動物群の生活態度は、ヒップスターとちつともちがっていない。すべては高度に工業化され、多少とも温情主義的に支配されている国々に一般的、同じ社会的現象、つまり個人の自我にたいする恐るべき損失という代価をほらうて、国家後援の『福祉』にひたった、極端な内的不安定の所産である。これこそ、一般に彼らが『回復』という、純個人的観念の水準で反応する一つの理由である——だが、何から、何にむかって『回復』するの

か、ということになると、だれもほんとは知ってはいない。

たしかに、マルクス主義者であるかぎり、私たちは、ノーマン・メイラーのいささかエクセントリックな〈第二革命〉論——「アメリカが悩んできた（戦時財政という、ほとんど自動調節的な経済的バルブのために）現代の諸矛盾は、ほとんど耐えがたいほどの心理的矛盾であり、ほとんど完全なオーウェルのアンビヴァレンスであった」——現代の革命は、プロレタリアートの組織された、戦闘的な運動以外の他の条件から起りうる——を基本的に受け容れるわけにはゆかないでしょう。また、ヒップスターの現象は高度工業国に一般的社会的現象である、として、メイラーの理想像「ホワイト・ニグロ」のアメリカ的狭さを指摘したマラーの批判は、当を得ている、と言うことができるでしょう。しかし、にもかかわらずマラーが見落している重要なことは、（おそらくは、平和主義・民主主義・市民主義に過敏性アレルギー反応をすぐに示すそのトロツキスト・イデオロギーのゆえに、マラーが見落してしまっている重要なことは）、高度帝国主義諸国における「純粋戦後世代」の歴史的登場の一般の意味——核世界戦争の脅威と両体制間の平和共存とが裏腹に貼りあわさっている現代的条件のもとで、久しくつづいた冷戦下の経済成長・福祉国家の不妊の胎内から出現してきた「純粋戦後世代」の社会的・文化的意味です。しかも、それは、マラー自身が知悉しているように、「ル・プロレタリアート」という名の「処女懐胎神話」が、崩壊を余儀なくされた後に、高度帝国主義諸国におけるプロレタリアートのヘゲモニー能力（とくに核文明社会に生じている精神的危機・心理的矛盾に対する知的・道徳的ヘゲモニー能力）が遅滞しているという現実的条件のなかで、さまざまな逸脱や弱

点や汚物を随伴させながら、〈市民的不服従運動〉として出現してきているわけです。

彼らの知的反乱がまともっている、市民主義・非暴力主義・実存主義・無政府主義等々の哲学的マントは、大衆化現象・官僚化現象を顕著に示している今日の「福祉国家」において、見るべき民主主義的・社会主義的イニシアチブをいまだに発揮できないで足踏みをつづけている改良主義的・官僚主義的な労働運動の、いわゆるイデオロギー的代償・昇華にはかならない、と言えましょう。独占ブルジョアの二大政党制の枠内にあるブルジョア改良主義としてのAFL-CIO連合労働組合運動と、それぞれにセクト化した極少数派としての社会主義政党活動とが、その政治的特徴を成しているアメリカ合衆国においては、すでに見たように、ピート・ブリスニクの現象はより鮮やかな戦後派的特色を呈していますが、この一般の意味は、労働党政権下のイギリスにおいても、ド・ゴール体制下のフランスにおいても、「タブー」の中の「福祉国家」であるといわれる西ドイツにおいても、そしておそらくは（高度帝国主義国であるかぎり）この日本においても、基本的にはさして変りはないのです。

全イギリスのみならず全世界に電撃をおよぼした第一回イースター・マーチの「よき金曜日」を回顧して、ノーマン・モスは、それは「懐疑と混乱の時期であり、第二次大戦後の世代がはじめて姿をあらわし、オズボーンの「怒りをこめてふりかえれ」が演劇界に衝撃を与えていた〈怒れる若者たちの時代〉であった」と述べています。モスはまた、オルダーマストン行進の参加者の年齢が、年々低くなった事実に触れ、「第一回目の行進の雰囲気

が「怒れる両親」のそれであったとすれば、第四回目の行進は「青春の反乱」とでもいうべきものになっていった」と指摘しています。私たちは、オルダーマストン行進の戦闘的隊列のなかに、容易に、「デイ・ボーイズ」「ブランチ・ヤング・メン」の姿を見つけることができます。バートランド・ラッセルを先頭とする「百人委員会」には、ジョン・オズボーンが参加しただけでなく、同じ劇作家のロバート・ポルト、アーノルド・ウェンサー、女優のヴァネッサ・レッドグレイヴ、詩人のクリストファー・ローグ等が、参加しました。そして、E・P・トムソンの評価にすれば、「非核武装運動に参加した数千の人々はその目的を達しなかつたけれども、運動の結果、労働党は危機の間にまで追いこまれ、党指導者は緊急集会を招集しようと駆けずりまわり、官僚制的中央集権主義の代名詞にまでなっていた巨大組合は上を下への大騒ぎとなり、われわれのものと考え方は一変し、核実験停止を促進し、おまけに政治屋たちの気のぬけた平和愛好用語集にどつきりと新しい単語を提供することになった」のでした（『頹廢の地点に立つて』）。

「青春の反乱」は、トムソンが「社会主義の実現のためには成熟しすぎている」イギリス社会において「頹廢」がとる形式にはかならないとみなしている（『政治的無関心』を、突き破ったのです）。それは、「機会国家」イギリスの十年の実態をあげざし、「繁栄の神話」の幻想性を露呈させたばかりではなく、ブルジョアの福祉国家に順応して人間的想像力をすっかり失ってしまった労働党の社会主義の低調さかげんをも、容赦なくさらしたものにしたのでした。「要するに、労働の性質の変化、完全雇用、新しい住宅、テレビと冷蔵庫と自動車とアート紙をつかった雑誌

に基礎をおいた新しい生活様式——これらすべてのものがわが党の政治的な強みをも生みだしたのである」——このブラックブール大会における労働党首ゲイツケルの自足しきった演説をとなえて、ステュアート・ホールは鋭く、「テレビとアート紙をつかった雑誌に基礎をおいた生活様式、それが果たして生活なのか」と詰めていきます。「労働運動が過去五十年間あらゆる艱難をくぐりぬけてきたのは、ただアート紙をつかった雑誌の前にひれ伏して死滅するためだったのか。労働運動には、自らの力と社会的潜在力としての自覚、もつと多様で、もつと修練を経た、もつと教育のある、それほど歪んで狭められてはいない、それほど打ちのめされて挫折してはいない、自覚がないのだろうか。われわれはいまテレビと冷蔵庫の前に消え去っていかうとしているのであろうか。ゲイツケル氏の演説に示されたものは、政治的な想像力の悲劇的な欠如にはかならない」（『需要の供給』）。

イギリスの（反既成）運動は、既成大組織の周辺から、この「政治的な想像力の悲劇的な欠如」を補おうと試みている若い運動にはかならないでしょう。ホールは、「戦後の繁栄の実質が終るところで、豊富の幻想が始まる」と言い、トムソンは、第二次大戦後の世代は「死者の屍臭と権力政治の悪臭」にとりかまされて生きてきた、と言い、ビーター・ワースレーは「イギリス国民はヒロシマの原爆雲の影に、朝鮮戦争とマウマウ狩り、ドイツ再軍備にたいする両党一致の支持とダレスの瀬戸際政策の脈絡のなかで育ってきた」と言っています。さらにワースレーに言わせるならば、そうやって生きてきた私たちは今日、「コップに八分の一のポツリン菌で人類を破滅させることができる」文明的水準にまで達しているのです。そのことを指摘した論文「帝国主義の

後退」の同じベージのなかで、ワースレーは、「われわれは、なにかある巨大な統計上の計算のなかの、一個の記号として死なねばならぬ運命にあるのかもしれない」というノーマン・メイラーの一句を引用しています。この一句は、『ホワイト・ニグロ』から引用されたものにちがありません。こういう非個性化的疎外からの戦後世代の脱出衝動は、西ドイツのような、一家庭平均十、二個の植木鉢を持ち、夫婦の八四パーセントが同じ趣味をもち、夫の八九パーセントがその結婚に満足、七六パーセントが生れ変わったときにも同じ妻を持ちたいと願っているという、なにか途方もない巨大な統計上の計算のなかの一個の〈平均人〉が育成馴化されてしまっているらしい超福祉国家においてさえも、〈復活祭平和行進〉や〈ドイツ平和同盟〉やマルチン・ニーメラーの〈無効投票のすすめ〉のような行動を出現させています。

ノーマン・メイラーは、『ホワイト・ニグロ』の冒頭に書きつけています。「おそらくわれわれは、強制収容所や原子爆弾が現代に生きるほとんどもすべての人間の無意識な心に、どんな精神的荒廃をおよぼしたかを、はっきり知ることにはけつてできないだろう。……それ（一個の記号としての死）は、われわれが自らえらんだ真剣な行動の結果としての威厳ある死ではなくて、ガス部屋か放射能都市における機械仕掛の神による死である。……経済的文明のただなかで、われわれの精神そのものは、死が理由のないものなら、生もまた理由がないだろう。そして、時間は因果関係をはぎとられて、停止してしまっただけだ、という耐えがたい不安にさらされたのである」。フランスの実存主義者であるサルトルが「さらば、われらが存在理由よ」と叫んだのは、すでに戦時中の作品『嘔吐』においてでした。「人間は、何ら特別な尊厳を

持っているわけではなく、無意味で不当な存在、不条理で偶然的な存在をしか、持っていないがゆえに、平等なのである」（『唯物論と革命』）。欧米の知識人・学生・市民の能動的な部分をとらえているこのような危機意識の、発想基盤を、私たちは政治的な想像力をもって洞察する必要があります。彼らの革命イメージが、旧来の「窮乏革命」「飢餓革命」としてではなく、「疎外革命」「サイキ革命」として出てくる客観的根拠を、現代のマルクス主義者は豊かな人間的想像力をもって分析する必要があります。私たちはすでに、ピースニクが、黒人の地下文化から学んでいるだけでなく、アジアのガンジの非暴力不服従哲学からも学び、〈全人〉の理想をもち、〈直接参加民主主義〉を提唱していることを、目撃しつつあります。

私見では、欧米帝国主義諸国の胎内から自生した鬼っ子である新しい急進主義的な平和運動は、主体的な市民的自発性、日常性の危機の直観、反権力・非暴力・不服従の行動戦術、市民的インターナショナルリズムともいえるべき開かれた視点、永久市民革命的な理念等の、注目すべき一般的性格をそなえています。それは、社会主義の「幻滅」、大組織のヘゲモニーの「遅滞」、大衆・官僚社会における「政治的無関心化」を、その周辺から突き破る戦後世代の自己主張として出現したのです。わが国における平和主義・市民民主主義運動は、欧米諸国のそれに比して、実生活者の・職業市民的特色が強い、と私は考えますが、それにしてもことの生ずるにいたった歴史的事情や一般的性格には大略変りはない、と言わなければなりません。

欧米における戦後世代が皮肉にも〈黄金の六〇年代〉に開始した知的反乱は、たしかに「革命」ではなく「反乱」であり、レヴォ

ルトにすぎないとさえ言えるかも知れません。ましてや、その知的反乱は、故リンドナーによって「精神病者は理由なき反逆者であり、スローガンなき扇動者であり、綱領なき革命家である」と評された、精神病者の理由なき反逆の域からさらに強力で大衆的に脱却しなければならぬことは、申すまでもないことでしょう。

ステューアート・ホールが結語としているように、政治的な想像力の悲劇的な欠如を補おうとするこれらの試みにおいて、「ただ一つ問題なのは、われわれが手遅れにならないうちにそれを行うことができるかどうかである」のですが、そのことの成否は、一方的にこうした新しい知的反逆者の側にだけかけられているのではなく、革命的階級の側にもかけられているのです。小組織、平和主義、市民民主主義の側にだけかけられているのではなく、む

しろより重く、大組織、労働運動、マルクス主義的前衛の側にか
けられているのです。現段階における平和運動の真の大衆的再
建、発展の道は、欧米のみならずわが国においても、ヘルンキ
世界平和大会においてJ・D・バナールが訴えた「多様性の中
における統一」、六・九国民行動日に日高六郎さんが訴えた「独自
と共同、自主と連帯、多様と統一、特殊と普通のあいだの関係の
問題」、へべ平連『発足にあたって小田実さんが訴えた『統一』
ではなくて連合、『組織』ではなくて運動』という基本線にお
そらくはあるのであって、民族民主主義的な自己増殖・同質化に
あるのではないことともちろんのこと、「掘るべきは、労働者階
級と、その政党であり、その他ではない」というような本卦がえ
りの空言の指示する方向にあるのではないでしょう。